小学校体育授業における
学習者の AAR サイクルに求められる教師行動

眞野　杏里　（　横浜国立大学　）

１．目的

本研究では、小学校体育授業における学習者の自己調整学習（AAR サイクル）の実態を明らかにし、AAR サイクルを促す教師行動のあり方を検討することを目的とした。

２．研究方法

１）対象者：①小学校第 3 学年 C 組 34 名
②担任教諭（教職歴 14 年）

２）単元：体つくり運動「3 色ことば当て鬼※」
テーマ「動きの質を高めるためには？」

３）調査方法及び分析方法

①自己調整学習方略尺度を用いた単元前後の平均値比較（須崎・杉山，2015 を改変）

②学習者のふり返り（自由記述）の共起ネットワーク分析

③教師を対象とした半構造化インタビューの SCAT 分析

④教師行動のエピソード記述分析（鯨岡，2005）

３．結果と考察

１）単元を通じた学習者の AAR サイクル

単元前後の質問紙調査を分析した結果、「自己省察」段階因子について単元後の方が前よりも有意に高くなった（$p < 0.05$）。

学習者のふり返りを分析した結果、単元を通して「動きの質」を高めるために、自らの学習状況を把握し、文字を隠す方略を試行錯誤する等の「動きの調整」がみられた。すなわち「主体的に取り組む態度」の評価に求められる「自らの学習を調整」（中央教育審議会，2019）する姿勢が表出していたと考えられる。

以上の結果から、学習者による自己調整学習（AAR サイクル）が実践されていたといえる。

２）学習者の AAR サイクルに求められる教師行動

インタビューデータを分析した結果、16 個の構成概念が生成された。以下、構造化した構成概念（図 1）及び抽出されたエピソードをもとに学習者の AAR サイクルに求められる教師行動の特徴を検討した。なお、SCAT 法で抽出された構成概念は〈 〉（山括弧）で括り記述する。

教師は本実践において**〈学習者の自己調整学習スキルの実態の把握〉**を行ったのち**〈学習者の実態に最適な学習方略の検討〉**を実施するといった「見通し」をたて、個や状況に応じた多様なファシリテーションを「実行」していたと考えられる。

また、上記の教師行動は、授業内において**〈学習者の実態を踏まえた「行為の中の省察」〉**を行い、即時的な AAR サイクルを廻すとともに、その結果に基づいて**〈学習者の実態を踏まえた「行為についての省察」〉**を行い、単元毎の AAR サイクルを廻すことで成り立つと考察された。

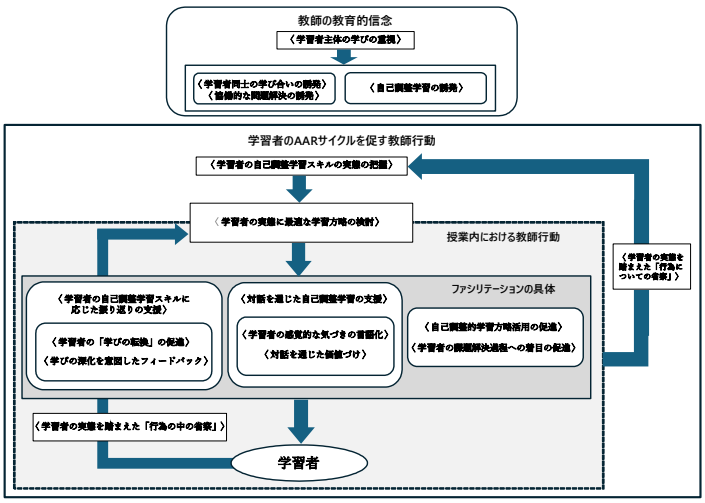

図１　授業者が意識する自己調整学習に関する教師行動の概念図

４．結論

自己調整学習が希求される中、すべての学習者が AAR サイクルを駆動できるわけではないと梅澤（2023）は言及している。すべての学習者が AAR サイクルを廻すためには、教師が絶えず学習者の学習や思考の状況を見取り、「見通し、実行、振り返り」を繰り返すことが重要であると考察された。

５．主な参考文献

須﨑・杉山（2015）　自己調整学習と体育授業に対する適応との関連．九州体育・スポーツ学研究，第 29 巻，第 2 号，1-12

※相手チームの背中か胸の一文字を読み取り繋ぎ合わせた「ことば」を当てるとともに、自チームの「ことば」を隠す鬼ごっこ